

衝撃のラストシーン「レ・ミゼラブル」映画『あん』

The freedom everyone needs
Hunger où l'art de déranger
『コースト・ガード』に見る境界線

ドラえもん世代 Relevant Now More Than Ever

「蝶の舌」に込められた想い 映画狂時代

「タンサー・イン・ザ・ダーク」
二十年ぶりのタイタニック

冬に神田川で 豊かさの追求 名も無きソ連の映画

映画ファンと言える日のために

観るよろこびのために

ベルイマン『沈黙』をめぐるメモランダム

私の「世界一」の映画

あの時の感動が今も忘れない、あの驚きの意味をあなたに伝えたい

人間の心、神秘が宿るところ

ヴィム・ヴェンダース監督『パリ、テキサス』（一九八四年）

Growing Through Relationships

Stagecoach

人生を変えた我が師について——植村直己物語

逆行する時間が描く世界の不確かさと不安

人生の灯台となった映画

亡命ソ連人監督が描くビザールなアメリカ

「A Beautiful Mind」から学ぶこと

オオカミ少年の瞳

「SALUTE」メキシコ五輪表彰台での差別抗議

A Movie for Teaching Language and Cultural Understanding: "Fried Green Tomatoes"

豊かさの追求

浅井寿生

The Family Man (邦題：天使のくれた時間) が配給されたのは二〇〇一年なので、ちょうど二十年前の映画になるが、この映画は原題の方がその意味をはっきり表している。まず、Family Man というのは、家族思いの人の事であって、決してそういう名のヒーローやキヤクターではない。映画前半に登場する主人公(ニコラス・ケイジ)は、ニューヨーク・マンハッタンで超凄腕ビジネス経営者で、世間や社員から注目される富豪である。ある日突然、雑貨店に押し入った強盗から店や強盗本人を救った優しさを認められ、what if (もしこうだったら) の世界を疑似体験することになる。そこでは、自身は幼い子どもたちと妻と郊外で平凡な暮らしをしている父親・夫である。育児や仕事に追われる日々は、会社経営とは全く違う忙しさだ。

Family Man としての人生を体験していくうちに、家族の温かさ、家庭を持つ意味、お金のためだけに働くことへの空虚感や、ついには生きる意味についてまで思いは巡っていく。安い給料のタイヤショップに勤務しながらも、そこでのセールス成績はトップだ。子どもたちや妻、友達に囲まれている温かい日々を過ごす中で彼は、なるほど、これがロンドンへ留学しなかった場合の人生設計か、と気がつく。

資本主義の世の中で人々が憧れる豊かさの真つ只中にいたエリートとしての人生と、平凡な仕事と平凡な家庭を築いた中産階級としての暮らしを同じ人物が比較するという物語なのだ。

この映画のような設定は、実際にだってありえるだろう。脱サラが行ったり、田舎暮らしが増えたりと現在日本でも豊かさの再構築がなされている最中だ。古い映画だが、豊かさの追求という恒久的な課題を考えるのに一役買うこと間違いないだろう。

(あさい としお)

観るよろこびのために

石田聖子

ふだんイタリア映画を研究しており、イタリア映画のことを高く評価している。しかしここでは、専門のことは抜きに、これまでにもっとも心奪われた映画を紹介したい。ジョージア生まれのアルメニア人監督セルゲイ・パラジャーノフの『さくろの色』(一九六九)である。

映画は、それがひとつの世界といつてよいほど雑多な要素を含む総合体である以上、さまざまな見方が可能だ。音楽に関心のあるひとは映画音楽にひかれるだろうし、ファッションに敏感なひとは衣装に着目するだろう。かつてひとつとはスターの見目麗しい姿を拝むべく映画館に集った。現在はどうか。観客の多くはストーリーを重視しているのではないか。ある映画を取り上げる際、ストーリーを主要なエレメントとして扱うことが多い。ネタバレを嫌う傾向もこうした姿勢を反映している。

わたし自身は映画のストーリーには興味をひかれない。ストーリーに気を取られるのがいやで、あらかじめストーリーを頭に入れてから鑑賞に臨むこともあるくらいだ。わたしが映画に期待するものは、視覚的な美に尽きる。

その意味で『世界一』の映画が、『さくろの色』だ。十八世紀アルメニアの吟遊詩人サヤト・ノヴァの生涯を扱う本作がストーリーを度外視していることは、開始早々クレジットで示される。曰く、「この映画はサヤト・ノヴァの伝記ではない。『…』人間精神の最高の勝利の一つと謳われた中世アルメニアの抒情詩のもつ詩的世界のイメージを映画という手段で伝えようとしたのだ」。大学時代に、ロシア語を学ぶ友人に勧められて鑑賞し、衝撃を受けた。この世にこんなに美しい映画があったのか、と。次から次へと美と象徴に満ちた細密画さながらの映像が続く。観ることの純粋なよろこびが湧きあがり、身体の内から癒される。言葉では言い表せない、感覚を通じてこそ伝わるものがこの映画にはある。

ストーリーに耽溺するものもよいが、ときには純粹に観るよろこびを味わうために映画に向き合っているかがだろうか。

(いしだ せいこ)



私の「世界一」の映画

『ダンサー・イン・ザ・ダーク』

磯村昌彦

本作は二〇〇〇年に公開されたミュージカル映画である。第五十三回カ
ンヌ国際映画祭で最高賞パルム・ドールに輝き、主人公を演じた歌手の
ビョークが主演女優賞を獲得するなど高い評価を得た。他方、「二度とみ
たくない」など否定的な感想も多い。私は映画に造詣が深くないので、以
下では感じたことを率直に述べていく。

本作を端的に表現するならば「救いのない映画」であり、「理不尽で残酷な映画」である。「鬱映画」と形容されることもある。なぜこのような映画が私にとって「世界一」なのか？

私は二十三年間、民間企業に勤務し苦勞の連続であった。入社後三年間は何をやっても上手くいかずパニック状態であり、私とは対照的なセンス溢れる後輩に強く嫉妬していた。四十代前半を過ごした北米ではアメリカ、カナダ、メキシコと飛び回ったが思うような成果を出せずに苦しんだ。努力では挽回できない自分の才能のなさは何度も嘆いた。

社会に目を移すと、昨年からコロナ禍、少し遡っても東日本大震災、金融危機など個人の力ではどうしようもない事態が数年ごとに発生している。誰かが悪いわけではなく、突然不幸が降りかかってくる。

本作が描くように、そもそも人生、社会は不平等であり、残酷なものなのだろう。そしてこうした理不尽を抱えたまま、自らの信念、目標のために日々精進するしかない。

本作のエンディングは特に理不尽で残酷である。それゆえ私にとって印象に残る（世界一）の映画なのである。

（いそむら まさひこ）

ヴィム・ヴェンダース監督

『パリ、テキサス』（一九八四年）

伊藤達也

映画に目覚めたのは、大学生の頃に読んだ四方田大彦の『映画はもうすぐ百歳になる』がきっかけだったと思う。それ以来ビデオレンタルで古今東西の映画を見ることを覚え、それでも足りない場合はアテナ・フランセでの特集（投影字幕付きのダニエル・シュミット、アラン・ロブ＝グリエ、ストロブ・ユイレ、マルグリット・デュラス等々）を見に行き、パリに留学してからは、当時はシャイヨー宮にあったシネマテークまで侯孝賢のテレビ時代の作品やジョナス・メカスのレトロスペクティブ足を運び、ボンビッドウ・センターでゴダールのビデオ時代の作品を視聴し、カルチエ・ラタンの映画館では日本では見られない大島渚やバゾリーニの映画を見た。現在は、ゴダールの作品が首都でしか上映されないことを残念がりながら、ミヒャエル・ハネケやダルデンヌ兄弟、クリンスト・イーストウッドやウディ・アレンの新作が来ればミニシアターやシネコンに出かけて行く。

最近ばかりで見た映画を改めて見なおす楽しみも知った。例えば数年前の夜、偶然パリにいた私は、監督自らデジタルリマスター化した『パリ、テキサス』の特別上映のためヴェンダース本人のトークがあると知り、ベルシーに移転した新シネマテーク前の長い列に加わっていた。ステージに用意された椅子にかけたドイツ人監督はゆっくりとしたフランス語で、デジタルリマスター版では上映当初のフィルムの色や質感を再現したと語った。暗闇の中ライ・クーダーのスライドギターの音で劇場が満たされ、埃じみた紺のスーツに赤い野球帽を被ったハリー・ディーン・スタントンがどこまでも続く黄色い砂漠を、ほぼ空のポリタンクを手にいつか尽きるかという危うさで歩き続ける。ハゲタカが獲物を狙う目つきで見ている。映画が終わった頃は真夜中を過ぎていたが、冬のパリを散歩しながら全身で余韻に浸ることができた。



どのような映画も世界一であることはありえないが、ある瞬間だけ世界一だと思える瞬間はある。パリで見た『パリ、テキサス』は、そこにパリは全く出てこないのだが、ヴェンダース監督のおかげで、八十年代と現代が繋がり、その時だけ世界一の映画に思えたのだ。コロナ禍はシネマテークでの上映を全て延期にしたと聞く。大量生産品を特別なものにする、劇場で映画を見る機会が一刻も早く戻って来て欲しい。

（いとう たつや）

二十年ぶりのタイタニック

今泉景子

私自身は普段から映画を観るタイプではないが、気に入った作品は何度かリピートして観て、その世界に入り浸ることはある。その中でも印象深い作品は「タイタニック」である。一九九七年に公開され、当時は大きな話題となった映画である。学生達も一度は観たことがあるのではないだろうか。

当時、学生だった私は、恥ずかしながら「レオ様」（レオナルド・ディカプリオ）を見ることがメインで、友達と映画館へ足を運んだ。最近久しぶりに観る機会があり、若き日のレオ様も堪能しつつ、当時とはまた異なる視点で楽しめたためそれを共有しようと思う。

自身の大学での専門はホスピタリティ、マナーやプロトコール（外交儀礼）のため、豪華客船での上流階級のマナーを大変興味深く見ることができた。華やかな第一礼装の着こなし、レディファースト、テーブルマナー、席次など、授業教材で使いたくなるシーンが多くあった。また、イギリスからアメリカへの航海の為、船内ではイギリス英語とアメリカ英語が混じり、いいリスニングの勉強にもなる。それぞれの気質も様々なシーンで見られるのも興味深い。映画の後半は沈没シーンになるが、有事の際には、人の本来の性質が出るもので、その立ち居振る舞い、人の心の動きも考えさせられるものがあった。約二十年ぶりに見た「タイタニック」は、これまでの知識や経験によって、より興味深く、学びの多い「教材」となっていたことには、正直驚いた。時間を経て、新しい発見があることを教えてくれた、今の私にとって世界一の映画だと言えるであろう。

（いまいづみ けいこ）

「蝶の舌」に込められた想い

大岩昌子

二〇二〇年春、世界中の教育機関は衝撃的な変化を余儀なくされた。フランスの大学評議会がいち早く発表した、「大学とは交流の場であり、教員と学生の直接的な対話こそが大学の生命」との声明もむなしく、世界の大学で、遠隔教育がその中心に据えられることとなった。

そんな年の瀬、私は簡単な手術を受けた。五日間の入院だったが、術後に若干の安静が必要と告げられていたので、病室に数本の映画を持ち込んでいた。そのうちの一本が、今回紹介する『蝶の舌』（一九九九年公開、監督・ホセ・ルイス・クエルタ）である。

舞台は一九三六年、スペインのガリシア地方。喘息持ちのため、一年遅れで小学校に入学したモンチョは、人見知りで他の生徒になかなか馴染めない。そんな彼に、担任のグレゴリオ先生はどこまでも優しく接し、「知る」楽しさを伝えるのだ。ある日先生は、モンチョらと一緒に虫取りに行き、蝶の舌の仕組みなどを解説する。先生とのやり取りを通じて、モンチョは人間的に大きく成長していく。そんななか、スペイン内戦が勃発。共和派支持の姿勢を貫く先生は連行されてしまう。モンチョは父が共和派党員だったことを隠すため、先生に向かって「無神論者」と叫ぶのだが、同時に「蝶の舌」と呼びかけるのであった。グレゴリオ先生にだけわかる暗号として……

映画は、日常のどこにもある大切な時間を教えてくれる。静かに包み込む自然。先生との触れあい。モンチョの輝く表情。そこには確実に、かけがえのない「直接的な対話」が存在していた。

二十一年三月、出版会より『世界は映画でできている』（石田聖子・白井史人編著）が刊行される。二〇一九年に開催されたプレミアム・シネマ・トークシリーズ全五回（WLA C主催）をもとに編纂された「映画の図書館」だ。

映画好きの皆さま、ぜひ、お手元に一冊を。

（おおいわ しょうこ）



私の「世界一」の映画

逆行する時間が描く世界の不確かさと不安

小野展克

レナードは強盗に妻を殺された上、強盗に殴られた後遺症で記憶が十分に保てない前向き健忘症を患う。レナードは障害を抱えながら、強盗への復讐に執念を燃やす。冒頭のシーンでレナードはテディと呼ばれる男を射殺する。次のカットで時間軸が巻き戻される。モーテルの部屋にいるレナードは拳銃に銃弾を込めて部屋を出る。そこにテディが登場。彼を認識できないレナードは数枚の写真の中から、テディを探し出す。写真には「奴の嘘を信じるな」とのメモ。メモは事実なのか。テディは本当に強盗犯なのか。すべてが、あやふやで不安と焦燥が交錯する。

カットは、順に時間を逆行する。ここに映画「メモメント」を作り上げたクリストファー・ノーラン監督の巧妙な仕掛けがある。観客は時間の逆行でレナードが直面する不安な世界に引きずり込まれる。短期記憶が失われた世界は人間関係を不確かにし、存在の意味を解体していく。

カラーで描かれる物語の一方、白黒で別のエピソードが挿入される。モーテルの部屋にいるレナードは電話でサミーの話をしている。保険調査員のレナードは、短期記憶を失った公認会計士のサミーに保険金を支払うべきかを調査している。サミーの障害を詐病だと疑うレナード。レナードの現実と奇妙に符合するサミーの話は事実なのか。それとも妄想なのか。短期記憶を失うレナードは、重要な事実は身体に刺青で刻み込む。電話の途中でレナードは「電話に出るな」という刺青に気付く。長電話の中で、レナードは電話の相手が誰なのか分からなくなっているのだ。

我々は不確かな記憶の中で、手帳を繰り、メールを検索して事実を確かめ、テレビや新聞、ネット、SNSで世界の姿を知ろうとしている。しかし、ニュースは、様々な意図で歪み、自分自身に依拠するバイアスからも逃れられない。明らかフェイクもある。そして自身の記憶すらも都合よく改ざんしていることは誰もが経験済みだろう。

レナードの姿は、我々が生きる世界の不確かさを思い起こさせ、存在の不安や焦燥を鮮やかに描き出しているのだ。

(おの のぶかつ)

ベルイマン『沈黙』をめぐるメモランダム

亀山郁夫

「世界一」と呼ぶわけにはいかない。けれど、最近、観た映画のなかで抜きん出た印象に残った作品であることはまちがいない。舞台は、第二次大戦後でもない東欧圏の、「チモカ」と呼ばれる架空の町（ちなみに「チモカ」の語源は、日本語ではないか）。心臓の病を抱える翻訳家の姉エスターと妹アンナ、そしてアンナの幼い息子ヨハンが、旅の途中、およそ言葉の通じない異邦の町に降り立つ。

タイトルが示す神の「沈黙」は、何よりもまず、そのバベル的状况に示される。つかのまながら、言葉が通じない世界にせり出してくる原理とは、むきだし欲望である。欲望こそは、言葉を介しない、もともと原初的なコミュニケーションの形だから。発作に苦しむ姉の面倒を見ることもなく暇を持て余して町に出たアンナは、カフェで出会った男とのゆきずりの関係におはれる。

だが、『沈黙』における最大のバベル的状况は、同じ母語で語りつつ、ついに和解の道を開くことのない姉妹の関係性のうちに現出する。ホテルに置き去りにされ、「死にたくない」と絶叫し、神と亡き母に救いを求めるエスターだが、その願いはついに、そのいづれにも聞き届けられない。ない。

底知れぬ絶望感に包まれた作品だが、かすかながら希望の光は感じられる。妹アンナの息子ヨハンの心にきざす慈しみの力——慈しみもまた、原初的なコミュニケーションの形そのものではなからうか。印象深いシーンを一つ挙げておこう。いがみあう姉妹を宥めるかのように、一瞬、パツハの「ゴールドベルク変奏曲」がラジオから流されるシーン。面白いことに、曲目を尋ねられた姉のエスターは妹にむかって、作曲家のファーストネームをあえて省略して答える。省略された名は、むしろ、ヨハン。このささやかなシーンは、『沈黙』における少年ヨハンの立ち位置をおのずと決定づけるものとなる。言葉を介さない純粹音楽への憧れにも似て、母への盲目的な愛から、苦しむ伯母への、より開かれた愛に目覚めるヨハンこそ、このバベル的状况にあって、神の「沈黙」に替わる唯一の力となりうる、とベルイマンは語ろうとしているかのようにある。

(かめやま いくお)

衝撃のラストシーン『レ・ミゼラブル』

後藤希望

こんな衝撃的なラストシーンは観たことがない。登場人物ふたりの目。怒りに満ち溢れた黒人の子供の目。その子供に命乞いをしながら死への恐怖におののく白人警官の大人の目。ラストシーンに音は無い。上映後、かなりの間、座席から立ち上がるできなかった。

ビクトル・ユーゴーの名著『レ・ミゼラブル』の舞台となった街、モンフェルメイユで、負のスパイラルが生む悲劇がこの映画のストーリー。一九世紀後半から経済基盤の近代化が加速すると共に、フランスの都市郊外は工業地帯として発展していく。戦後はアフリカの旧植民地から多くの移民労働者が流入。戦後復興を果たし、グローバル経済にシフトすると、郊外地帯は貧困化と治安悪化が進んでいく。モンフェルメイユも例外ではない。そんな疲弊し、問題を抱えた「都市郊外を舞台にした映画が八十年代から撮られるようになり、『郊外映画』というジャンルがフランスで確立した」と、パリ在住のフランス人の友人が教えてくれた。

自分にとって衝撃のラストに繋がった要素が3つある。まず、白人も移民も子供も大人も登場人物全員が「レ・ミゼラブル」「哀れな人々」であること。地域の権力者たちによって抑圧され、社会の中で居場所がないモンフェルメイユに住む子供たちは哀れ極まりない。各登場人物が、フランスのみならず様々な国や地域で見られる人種や宗教による分断社会構造を象徴しているように思う。一方で、映画の冒頭の二〇一八年サッカーW杯優勝時にフランス国旗の下で歓喜に満ちている人種は多様だ。メディア・スポーツがナショナリズムの装置として機能していることを改めて痛感した。最後に、「哀れな」ひとりの少年のドローンが俯瞰で捉える地域社会の客観的な全体像は、現代社会が抱える闇をどのように伝えるのか、ジャーナリズムの本質を隠喩している。

客席で、今年のアカデミー国際長編映画賞の受賞は間違しと確信した。イスラム教が肯定的に描写されていることが、アカデミー向きでなかったのか。『パラサイト』と結果を知った時、ソファから立ち上がれなかった。

(ことう のぞみ)

映画『あん』

佐藤雄大

「店長さん……」。

樹木希林演じる主役の元ハンセン病患者の徳江さんがアルバイトとして働いていたた焼き屋で店長さんとやりとりしている時のこの呼びかけ声が映画のすべてを語っているようにも感じた。

映画『あん』は二〇一五年に公開された、ドリアン助川原作、河瀬直美監督の映画で自然を丁寧に撮影しているとても静かな映画である。ドリアン助川がハンセン病患者のことを題材に書いた小説なのでもちろんハンセン病に対する社会的差別がテーマとなっているが、監督河瀬直美が準備のために国立療養所を取材した時「初めてわかりました。病んでいるのは困いの外です」と漏らしたように、「差別」そのものを問い、その問いを通して「ひとは何か」を問いかけた作品であったように思う。

ハンセン病患者は家族と引き離され、子どもを持つことを手術で奪われるなど権力・世間によってすべてを奪われてきた。そのハンセン病患者の最期を徳江さんをおして見つめ、人間から奪っても奪いきれないものは何かをこの映画は考えさせる。徳江さんはただた焼き屋で自分の得意などら焼きを店長さんと一緒に作り、そこに通ってきっていた孤独な少女ワカナと話をしながら過ごしただけであつた。周辺が徳江さんがハンセン病患者であつたことを知り、お客さんが来なくなるとひっそりと姿を消し、そのまま亡くなつていった。徳江さんはただ二人の前を通り過ぎていっただけであつた。しかし、その徳江さんは生きる希望を見失っていた店長さんとワカナを前向きな気持ちにさせ、映画を見ていた人も同じように感じさせていたはずである。何がそうさせたのか？ 徳江さんはただ誠実に店長さんと向き合い、小豆と向きあい、ワカナと何気ない話をしたただだったが、そこに権力・世間が奪っても奪いきれない「誠実さ」が通奏低音のように流れてたように思う。「店長さん……」にはそれが集約されているように感じた。

一九〇七年に起源を持つ「らい予防法」は、一九三〇年代に無らい県運動も伴い制度として差別を助長し、一九九六年に廃止された。しかしこの『あん』で描かれているように差別は社会（そして人々）の中に残り続けている。この映画を見るたびに「奪う」ということの大きさに真摯に向き合わなければならないと感じる。

(ことう たけひろ)



私の「世界一」の映画

冬之神田川で

白井史人

自分と映画との関わりを決定づけた作品はたしかにある。ただ、そのタイトルを挙げるべきか躊躇している。その映画は、いつでも見返すことができるひとつの「作品」というより、具体的な日付と場所をそなえた「体験」としてよみがえるからだ。私にとってその映画は、ジャン・マリ・ストロップとダニエル・ユイレが撮ったオペラ映画『モーゼとアロン』だった。

日本映画の音を論じる修士論文の締切を控えた師走、私は出口の見えぬ執筆と校正の作業のかたわら、東京の御茶ノ水へ向かった。アテネ・フランス文化センターで、本邦何度目かのストロップ／ユイレ特集が連日開催されていたのである。彼らの名前は蓮実重彦や浅田彰の文章で目にしていたし、シネフィルの同級生が折に触れて熱く語るのにも聞いていた。しかし、私をこの上映に向かわせたのは、そんな知的好奇心よりも、目前に迫る論文に関係する映画で眼も耳もいっぱいになって、つかのまの逃げ場を求めるような切迫感だったように思う。

映画が始まり、男が後頭部に背をむけたまま歌い始めると、私はスクリーンにくぎ付けになった。カメラアングル、照明、天候のつながりなど無視したつぎはぎの映像にもかかわらず、歌手の声と音楽は奇妙なほどなまなましく途切れることがない。専用の映画館ではない上映設備は、それほど優れた音質ではなかったはずだ。それでも、ポリフォニクな現代オペラの声が、映像と一体の鮮烈なかたまりとして、いままさにここに「ある」——そんな印象につつまれて、上映のあと、ぼうぜんと冬之神田川沿いを歩いた。

その後の研究生生活で、『モーゼとアロン』はいくども見直している。しかし、あの時にみただあの感覚は、どんなに細かくひとつひとつのショットを分析しても、うまく言葉にできた気がしない。それが「世界一」であることを確かめようがないほど変わってしまったのは、自分なのだろうか、映画なのだろうか。

映画が「複製可能」などと、誰が言ったのだ——そんな恨み言をつぶやきながら、いまもまた、映画館の暗闇に逃げ込みたくなる自分を必死にとどめて、駄文を書き連ねている。

(しらい ふみと)

『A Beautiful Mind』から学ぶこと

高橋直子

映画鑑賞は私の趣味の一つだが、最近では実話に基づいた多くの作品を楽しんでいる。その中から『A Beautiful Mind』を皆さんに紹介しよう。

この映画はノーベル経済学賞を受賞したアメリカの数学者「ジョン・ナッシュ」の半生を描いている。

ジョンはコミュニケーション障害を持ちながらも、ウェストヴァージニアの謎の天才と呼ばれ、獲得するのに困難なカーネギー奨学金を得て、プリンストン大学大学院の博士課程に入学する。そして苦勞の末に「均衡理論」を導き出し、博士号を取得する。ジョンはその後、天才数学者として世間で認められ、家庭も持ち、しばらくは順風満帆な日々を送るのだが、次第に精神を病んでいき普通の生活ができなくなる。

この映画ではラッセル・クロウがジョン・ナッシュを、ジェニファー・コネリーが妻のアリシア・ナッシュを演じ、アカデミー賞の最優秀作品賞、監督賞、助演女優賞、脚色賞の四部門を獲得した。

この映画から学ぶべき点は二つある。一つ目は、ジョンの学問に対する姿勢である。ジョンは学問を愛し、理論を導き出す中でも、精神を病んで人から酷い扱いを受け続けても、一心に自分の研究に取り組み続けた。そして彼が老いた時、若い研究者たちがジョンに師事することになる。学問は私たちの知識と精神を豊かにし、視野を広げてくれる。学問を愛し続けたジョンの生き様を、この映画の中で感じ取って欲しい。二つ目は、人を信じる力である。ジョンの妻のアリシアは、ジョンが精神を病む中で辛い日々を送るが、ジョンを見捨てることなく支え続けることを決める。そしてアリシアと過ごす中で、ジョンは少しずつ変わっていく。

この映画はナッシュ夫妻を描写しながら、人を愛し信じるることについて、私たちに考える機会を与えてくれる。

いつか皆さんにとって、この映画が人生のスパイスになることを願っている。

(たかはし なおこ)

オオカミ少年の瞳

新居明子

コロナ禍により自宅で過ごす時間が長かったこの年末年始、遅ればせながら私も、二〇二〇年に大ブームとなった韓国の映画やドラマにすっかり魅了されてしまった。ここでは、私が今冬に観た韓国映画『私のオオカミ少年』（二〇二二年公開）を紹介したい。

本作品は、朝鮮戦争の傷跡がまだ生々しく残る一九六〇年代の韓国の田舎を舞台に、病弱な少女スニと野生の狼のような少年チョルスの心の触れ合いを描いたファンタジーである。怪物、人魚、宇宙人、人造人間などの人間以外の生物と人間との交流という、文学作品や映画で古くからよく使われてきたテーマを、本作品は「おとぎ話」のイメージで描いている。チョルスが子どもたちと野原で遊ぶ場面や、ギターを介してスニとチョルスの心が初めて通い合う瞬間など、多くの場面には暖かく柔らかな色彩と淡い光のフィルターがかかり、美しいおとぎ話のような映像になっている。雪だるまを作るチョルスのシルエットを活かしたエンドロールも、この世界観の演出を狙ったものだろう。

『私のオオカミ少年』の最大の魅力は、オオカミ少年チョルスを演じるソン・ジュンギの言葉を介さない繊細な演技である。まともなセリフはエンディングのみで、あとはうなり声やクンクン鳴く声しかないのだが、チョルスの喜怒哀楽といった感情のすべてが、ソン・ジュンギの目と表情、仕草だけで見事に表現されている。作品の設定やプロット展開に若干の突っ込みどころがあるのは否めないのだが、野生のオオカミの荒々しさや、子犬が懐いた主人に示すような一途な愛情表現があまりにも秀逸で、作品の世界に自然と惹きこまれてしまった。

何ともどこかしく切ないのは、人間の言葉が話せないばかりにチョルスが皆に誤解され、大好きなスニにさえ真実を理解されないまま作品が終わることだ。胸が痛くなるほど切ない映画を観たいときには、チョルスの純粹で哀しげな瞳が深く心に残る本作品をおすすめしたい。

（にい あきこ）

亡命ソ連人監督が描くビザールなアメリカ

沼野充義

これまでの人生で観てきた映画のうち、もつとも奇怪でもつとも衝撃的な、学生の皆さんには絶対に勧められない作品について書くことにする。

一九八三年、ハーバード大学に留学していた私は、『リキッド・スカイ（液体の空）』という作品が封切られたと聞いて、私にしては珍しく、町の映画館に足を運んだ。亡命ロシア人（正確には、ソ連出身のユダヤ人）がニューヨークの最先端の風俗を描いた作品だと聞いて、好奇心をそそられたのだ。ソ連からの亡命者は学者や文芸家、音楽家には珍しくないが、映画監督となると稀である。『リキッド・スカイ』の監督はスラヴァ・ツケルマンといって、私も初めて聞く名前だった。

冒頭から呆気にとられ、衝撃を受けた。映画館いっぱいには轟き渡る、ブリミティヴな電子音楽。目がおかしくなるのではないかと心配になるほどサイケデリックな色彩の乱舞（アンディ・ウォーホルのシルクスクリーンをもっと強烈にしたようだ）、ニューヨークのクラブに群れ集い踊り狂う若者たちの退廃ぶり。そして映画の全体がドラッグとセックスとヴァイオレンスに貫かれ、活字にできない「***」「***、***」といったフォーレターワードが飛び交う。そのため私の英語力では理解できない箇所が多かったのだが、SF的な物語の枠組みは——じつはこれが一番奇怪なのだ——理解できた。マンハッタンの高層ビルの屋上に空飛ぶ円盤が舞い降りる。宇宙人は、人間がセックスで絶頂に達したとき発散する脳内の化学物質を吸い取って、性交の最中に人間を殺してしまうのだ。ヒロインに次々と襲いかかる男たちはこうして奇怪な死をとげていく。そのせいか、フェミニスト映画の走りだと評価する向きもある。

日本では殆ど知られていないが、この作品は一九八〇年代アメリカのインディペンデント映画の先駆としてカルト的な人気を集め、異例の高い評価を受けた。それにしても亡命ロシア人が、どうしてこんな映画を作ることができたのか？ それについて書く紙幅はない。いずれ別のところに書くことにしよう。

（ぬまの みつよし）





私の「世界一」の映画

人生を変えた我が師について

―植村直己物語

根無二信

進学校に意気揚々と入学した高校一年生の私は、四月早々に躓いていた。²が無理数であることを背理法によって証明するという数学の問題の意味が皆目分からなかったのである。英語も然り。中学校とはレベルが違っていた。勉強への興味を失いながらもなんとか一学期を終えたが、二学期には既に手の施しようがなく、体育と美術以外は全て欠点であり、しかもその半分が0点だった。0点を重ねることには或る種の清々しさがあったが、勉強そのものの放棄にはどこか躊躇いがあった。進学校在籍という事実は大学受験という目的論の中に私を置いた。視野の狭い私には他の選択肢がなく、いつかは勉強しなければならぬという必然的世界の中を生きていた。

母の実家で植村直己の「極北に駆ける」という本を見つけたのはその頃だった。何となく背表紙に惹かれて手にしたこの本は、私を完全に変えてしまった。犬ぞりを現地で覚えてグリーンランド3千キロを単独横断する壮大な冒険に私は驚愕し、すっかり魅せられた。私は、自分で自分の人生を前に進めていくことができるということを学んだ。目的論は実存主義へ変わった。

高校卒業後、私は無人島生活や八重山諸島の放浪、インド放浪などを経て、徒歩と野宿によって日本を縦断した。この調子で自分の人生を歩いていくのだと意気込んでいたが、植村直己のような実力があるわけでもない。私は再び挫折した。その頃に、この希代の冒険家の半生を描いた「植村直己物語」を深夜のテレビで観たのだった。我が師は相変わらず凄かった。不器用にもがきながらも人生を前に進めていた。この映画がきっかけになったのかどうかは今となっては思い出せないが、私が学問をしようと思ったのはこの少し後のことだったと思う。

私は私の人生を生きている。それは植村直己に出会ったからである。だから私はコラムの共通テーマを「私の人生に〈世界一〉影響を与えた人物についての映画」として勝手に解釈し、今なおマッキンリーのどこかに眠っている我が師にこの小さなエッセイを捧げたい。

(ねむ かずのぶ)

「SALUTE」メキシコ五輪表彰台での差別抗議

濱嶋 聡

一九六八年メキシコ・オリンピック男子陸上二百メートル表彰台で、金、銅メダリストのアメリカ人の黒人、スミスとカールロスが、星条旗を見上げず、うつむいたまま裸足で表彰台上がり皮手袋をはめた拳を突き上げた。裸足は、南部の黒人の子供たちの貧しさ、ビーズのネックレスは、リンチで縛り首になった人、そして黒いスカーフは、奴隷船から投げ出され、サメの餌食になった人、それらを思いだした。しかし、この時銀メダルを獲得した白人のピーター・ノーマン（オーストラリア人）は、二人から「人権を求めるオリンピック・プロジェクト」のバッジをもらい、左胸に着けて表彰台上に立った。IOCは、スミス、カールロスとともに、ノーマンのこの行動も批判した。帰国後、ノーマンはひどいバッシングにあい、四年後のミュンヘン・オリンピック代表には、トップ・ランナーでありながら選ばれなかった。彼の記録は、今でもオーストラリア記録であるという。二〇一七年七月十九日、中日新聞（夕刊）に掲載された成城大学、山本敦久准教授の記事でも指摘されているように、現在なら国の誇りとも言えるこの行為が母国ではたまたたかれ、ノーマンは酒に溺れて家庭も崩壊し、二〇〇六年、六十四歳で亡くなった。ほとんどニュースにもならなかった彼の葬儀で棺を担ぐ人の中に、アメリカから駆け付けたスミスとカールロスの姿があった。二〇〇五年、スミスとカールロスの出身大学に、表彰台で拳を突き上げる二人の像が建ったが、ノーマンの像がなかったために立てるよう二位の場所は明けておくべきだ」と言った。二〇一二年、オーストラリア連邦議会が不当であつたと謝罪し、二〇一八年、オーストラリア・オリンピック委員会（AOC）も初めてノーマンの功績を表彰したが、AOCは、失われた彼の名誉については触れていない。このドキュメンタリー映画は、かれの甥、マット・ノーマンが作成し、オーストラリア各地の中高等学校にそのDVDが教材として置かれているという。

(はまし ま ゆうこ)

映画ファンと言える日のために

林 良児



(Marianne Faithfull 「あの胸にもう一度」)

二十世紀英国の美術史家ケネス・クラークは、「絵を見るということ」は積極的な参加を要求することであり、しかもその初期の段階においてはある程度の訓練を必要とする」と述べている。このことは映画についても言えそうである。そう思うようになったきっかけは同僚のネイティヴ諸氏との雑談だった。

思えば映画館に行つて映画を見ることがなくなつて久しい。それでも記憶をたどると、「ある愛の詩」、「卒業」、「ゴッドファーザー」、「あの胸にもう一度」(写真)、「暗黒街のふたり」といったタイトルがよみがえる。ライアン・オニールが演じる青年の一途さ、ダスティン・ホフマンが見せる純真な若者の危うさ、アル・パチーノが示唆する悪を志向する精神の凄み、マローン・ブランドが暗示する人生の盛衰、マリアンヌ・フエイスマルが表現する確かな愛の形、アラン・ドロンのが示す人間の悲劇性、ジャン・ギャバンが醸し出すすべてを見果てた人間のやさしさ。しかし、私の感想はそのような段階に留まる。制作されたのは何年で、監督は誰で、どのように評価されてきたのか。そう問われればなにも答えられない拙さになちまち身がすくむ。

それに比べて映画について語るときは彼らは誰一人作品の基本的な事項をおろそかにすることがない。悲劇を文芸の最高のジャンルとしてきたヨーロッパにあって、演じられるものに常に敬意を払ってきたフランスにはときに映画を詩や小説よりも上位におく傾向が見受けられる。そのような伝統が彼らのなかにもきつと息づいているのだろう。それ以来私のなかで映画に対する考え方が少しずつ変わったように思う。映画は娯楽と割り切れるものではなくて真摯に向き合うべき芸術なのだと。

クラークは、絵画作品をまねにして「純粹に美的な感覚を楽しむことのできる時間は、オレンジの香りを楽しむ時間より長くはない」と言う。そのような「愛好者の喜びの瞬間」を超えて芸術の美を共有するにはどうすればよいのか。映画鑑賞においても、視覚的体験を言語に移し変える訓練はやはり必要なのである。(はやしりようじ)

映画狂時代

福田眞人



高校時代に勉学に興味を湧かないことは不幸なことだ。新しい知識と情報に飢えていないはずはないのだが、学校の図書館以外ではどうも不幸だった。勉学に向いていなかったのだろうか。何か楽しみはないものか。不良にもなれず、男女交際など論外。図書館の書籍を端から順番に読んでも、限度がある。読書に励んでいるのにも目に悪そうだ。ゲームセンターは、面白くなさそう。そう、映画を観に行こう。新聞の映画欄は豊富で、映画のタイトルが所狭しと並び、まだ銀幕が輝いている時代。お金に困っている訳ではないが、集金的に観ると考えると、三本立てが最良の選択であると思ひ至る。どうやら京都には洋画(邦画ではない)の三館が対応している。古今の名画が並んでいる。

マカロニ・ウェスタンがあるのにまず驚いた。アメリカのTV俳優クリント・イーストウッドが出ていた。続けて観るとイタリア語版が出た。黒澤明の「七人の侍」が、アメリカの「荒野の七人」に翻案されているのを観ると文化の影響が容易い事と首肯できる。手塚治虫の漫画「吸血魔団」がアメリカの映画プロデューサーに採用されて「ミクロの決死圏」に結実したと思われる。手塚には最初に連絡があったとき、ついにローヤルティは払われなかったらしいと知る。日本じゃアメリカ版裁判は起こらないと踏んだな。

007は全部観た。DVDも全部ある。そんな時、「慕情」と訳されたウィリアム・ホールデンとジュニファア・ジョーンズの映画を観て、香港へ行こうと決めた。主題歌のいい悲恋物語だ。しかし、本格中華は満腹になるまで堪能したが、映画の舞台にはまだ一度も足を踏み入れていない。

(ふくだ まひと)



私の「世界一」の映画

「世界の破滅まで百秒」の時代に考える名作

堀部純子

人類が核兵器を開発して七十五年目となる二〇二〇年一月、米国の科学誌が毎年表示する「世界終末時計」が過去最悪の残り百秒を示した。核兵器使用のリスクの高まりが懸念される今、観ておきたい映画は「博士の異常な愛情、または私はいかにして心配するのを止めた水爆を愛するようになったか」だ。題名が異様に長いところから何かがおかしく。この作品は、世界が核戦争に最も近づいたとされるキューバ危機の頃に米国で制作されたスタンリー・キューブリックの名作だ。モノクロ映画で古めかしく感じるかもしれないが、作品が伝えようとするメッセージは今日でも非常に関連性のあるものだ。核戦争の危機と言えど、せしりアスな内容だろうと思われるに違いない。そんな既成概念を見事に壊したブラック・ユーモア溢れるコメディだ。英国の喜劇俳優ビーター・セラーズが一人三役を演じている点も見所だ。

映画は二機の核兵器を搭載した爆撃機の飛行シーンで始まるが、背景にはなんともロマンチックな音楽が流れている。緊張感のかけらもないばかりでなく、軍勢力や兵器に対するロマンティズムを感じることができ。ストーリーは一言で言えば、精神異常を来した米国の空軍司令官が対ソ連核攻撃命令を出してしまうが、政権幹部らは必至で止めようとするも止められず、最後には巨大なきの雲がいくつも発生し世界の終わりを告げるという内容だ。攻撃に至るまでの流れの中で、指令解除の暗号を自殺した司令官しか知らない、爆撃機の乗務員がマニュアル通りに発射手続を進めるといった核兵器の使用や管理についての不条理な手続、マニュアルに忠実な硬直した軍の文化などの問題が提起されている。また、自己利益しか頭でない政治指導者たち、人類破滅兵器を作り続ける人間の恐ろしさと思かさ、さらにはひとつのボタンの掛け違えが世界を破滅させてしまう様がシニカルかつ滑稽に描かれている。笑いが絶えない映画だが、昨今の国際情勢や核兵器を巡る状況に目を向けたとき、笑えない現実が今も存在していることに気づかされることだろう。背筋が凍るような危機感を感じさせ、核廃絶に向けた実際的な進展の必要性を認識させてくれる名作だ。

(ほりべ じゅんこ)

人生の灯台となった映画

真崎 翔

今回のテーマを広く解釈して、筆者の人生を変えた映画について紹介したい。幼少期、筆者は決して身体の強い子どもではなかった。小学四年生のある日、偶然にもブルース・リー主演の『燃えよドラゴン』（原題：Enter the Dragon）をテレビで視た。カンフー映画の金字塔とも言える作品である。凄まじい肉体をしたブルース・リーが悪者をバットバットとなぎ倒す姿に、完全に心を奪われてしまった。その日から、体を鍛えるようになった。ついには格闘技のジムに通い、プロとして活躍することを夢見て鍛錬を積む日々を歩み始めた。

現実には甘くない。中学・高校時代の度重なる怪我で、医者から格闘技を続けられないと宣告されてしまった。夢破れ、傷心状態で大学に入学し、自暴自棄な学生生活を送った。しかし、遊び呆ける生活は心の隙間を埋めてくれなかった。自分は逃げていたのだ。一念発起し、ブルース・リーも学生時代を過ごしたアメリカにレスリング留学することを決心した。

留学中にどうしてもしたいことがあった。ブルース・リーの墓参りだ。留学先のオハイオ州シンシナティから遙か北西のシアトルまで、彼の墓地を自力で探した。挫折した自分を再び燃え上がらせ、アメリカに導いてくれた彼の墓前で手を合わせた時、目頭が熱くなった。『燃えよドラゴン』に出合わなければ、全く別の人生を歩んでいた。

『燃えよドラゴン』は、決して世界的に評価の高い映画ではない。万人に勧めたい映画でもない。筆者は『ニュー・シネマ・パラダイス』のようなしつとりとした映画のほうが好きだ。本誌には、きつと場違いな映画だ。ざりとて、好きな映画、影響を受けた映画、何度も観た映画などはいくつかあっても、文字通り人生を変えた映画となると、この作品しか思い浮かばない。いつの間にか、あの日「出合った」ブルース・リーよりも年上になってしまった。歳を重ねるにつれ、背負うものが増えてきた。そんな時こそ、劇中の有名な台詞である「Don't think, Feel.」（考えるな。感じるな）を思い出したい。などと言ったら、年甲斐もないと叱られてしまうだろうか。

(まさき しょう)

名も無きソ連の映画

ムーディ 美穂

小学校一年生の時、体育館でソ連の映画を観た。自分にとって初めての映画であつたと思う。十年前の断片的な記憶を創造力で補つてみる。戦争中、ある町が空襲される。身寄りのない少女が、親とはぐれた小さな男の子を託される。

「パパとママは？」

何を聞いても男の子は答えない。こんなやりとりを覚えていた。「名前は何？」「……」「ママはあなたのことなんて呼んでたの？」「ほうや」食うや食わずの生活の中、少女と男の子は一時帰還中の兵士と知り合う。兵士は二人のことを気にかけて、次第に疑似家族のように過ごすようになる。が、長くは続かず、兵士は召喚される。少女は男の子の手を引き、ごつた返す駅に見送りに行く。そこで初めて兵士は自分の身の上を話す。自分には妻と息子がいたが、行方がわからないこと。息子の名前がミーチャであること。「ミーチャ」と言つた途端、男の子が顔を上げて言う。「ミーチャ、ミーツ、デイトリートー」兵士の顔つきが変わり、男の子を抱き上げる。煙を上げて汽車が駅に滑り込んでくる。彼は男の子を下ろすが、また抱き上げる。別れを惜しむ時間はあまりにも短い。兵士を乗せた汽車を見送る少女の顔が、驚きからゆつくりと微笑みに変わっていくところで映画は終わる。

正直なところ、一年生には難しかった。教室で皆ボンヤリしていると、担任の先生が説明してくれた。「ミーチャ、……」というのは、兵隊さんと息子の秘密の言葉だつたのです。それをあの男の子が知つていた……」そこで初めて一年生は感動し、「そうか！」と、驚きの声をあげたものである。題名もわからないし、「ミーチャ……」という言葉も怪しい。が、心に浮かぶ断片的な映像は鮮明で、その時の感動もはっきり覚えていた。先生がおさらりをしてくれたお陰である。新任の若い先生で、常にスーツ姿、子どもたちにも敬語で話した。厳しかったけれど、皆その先生が大好きだつたのは、授業が面白かつたからである。そしてイジメっ子にはしっかりと対峙してくれていた。

映画を観た数日後、先生との別れが突然やつてきた。ある朝先生は時間になつても教室に現れず、それっきりであつた。

あの映画と同じく、大好きだつた先生がなぜ突然いなくなつたのか知ることはない。小学生の自分に映画の楽しさを教えてくれたのは間違いない。あの映画なのだが、同時に少し淋くなるのはそのためである。

(むうでい みほ)

ドラえもん世代

室 淳子

二〇二〇年は、「ドラえもん」のコミック連載から五十周年を迎えた年であつたそうだ。書店をはじめ、いたるところで過去の作品を振り返る試みを目にした。「ドラえもん」の映画の方は、四十一年を数えたらしく、これまた懐かしいような作品がずらりと並べられ、グッズも目にした。

長めのストーリーを楽しむことができるようになった息子は、しばらく『ドラえもん』ブームを続け、かばんやらタオルやら筆箱やらをドラえもんに乗せた(その後、『忍たま乱太郎』に移り、今は『鬼滅の刃』ブームに乗つた)。昨春、埼玉の父親宅を早々に引き上げたのは、コロナの感染が広がり、名古屋に居なくなるといけないと考えた大人たちの判断によるものだけではない。お昼寝前に保育園の先生が話してくれるギガゾンビの話の続きが聞きたいと言う子どもの強い希望もあつたのだ。

息子は、アマゾンプライムで次々と映画を制覇していったが、調べるうちに、『のび太の恐竜』(一九八〇年)が『ドラえもん』の初めての映画作品であることを知った。記憶の限り、私が初めて映画館で観た映画である。「この映画見たことある人？」「はい！」という子どもとの他愛もないやりとりの中で、私一人が手を挙げた。

夏休みに、祖父母と兄と一緒に、京都の映画館を訪れた。今では考えられないが、『モスラ』との贅沢な二本立てで、これまた今では考えられないが、満席も満席。仕方なく通路の階段に座つた。一人くらいは席を見つけたのだつたかもしれないが、祖父が長い脚を持て余してつらそうにしていたのを思い出す。祖母は最晩年になるまで私たちに席を譲ろうとしたから、座つたはずがない。「モスラや、モスラ」という歌に後ろ髪を引かれる思いがしながらも、『ドラえもん』が終わると早々に帰り支度をした。

二〇一九年末に祖母が百六歳で亡くなつた。祖父母との思い出とともに、月日の流れを感慨深く受け止めた。

(むろ じゅんこ)



私の「世界一」の映画

『コースト・ガード』に見る境界線

安井朱美

舞台は、南北軍事境界線に近い韓国の海岸。朝鮮戦争以降、北の侵入に備え鉄条網が張り巡らされたその地に、徴兵されてやってきたカン上等兵（チャン・ドンゴン）。ある晩、彼の運命を大きく狂わせる事件が起こってしまう。軍事区域に侵入していた不審な人物を軍規通りに射殺したものの、それは北のスパイではなく、酒に酔い情事を楽しんでいた南の民間人男性だったのだ。自責の念に苛まれるカン上等兵、恋人を自身の目の前で射殺されてしまった女性。そして彼ら二人を取り巻く人々までもが、次第に常軌を逸していく。

二〇〇二年に韓国で公開された『コースト・ガード』（原題…해안선）は、韓国映画界の鬼才と呼ばれたキム・ギドク監督（二〇二〇年十二月逝去）と名優チャン・ドンゴンが組んだ作品である。映画館で本作品を見た時の衝撃の大きさは二〇年近く経った今でもまざまざと思い出すことができる。あまりの凄惨さにスクリーンから何度も目を背けずにはいられず、救いようがない暗さに茫然自失状態で、エンドロールが終わった後もしばらく立ち上がれなかったほどだった。海兵隊で五年過ごした経験を持つキム監督によると「民間人を誤射するというのは、実際にありえること」だという。その当時住んでいた韓国では軍服姿の軍人を見かけることはよくあったが、一見、平和な日本と何ら変わらないように感じられた。

現在も朝鮮半島は「境界線」を挟んで北と南で分断されたままである。そして、二つのものの境を指す「境界線」という言葉には、物事の境目という意味もある。目には見えない「境界線」を自らの意思ではなく、知らぬ間に越えてしまった普通の若者の普通の生活。これらは一旦、菌が狂い始めると、決して元の形には戻らない。日常と非日常、凡人と狂人はまさに紙一重であり、いつ誰がその「境界線」を越えてもおかしくない現実が、そして悲劇が常にそこにある。除隊を命じられても尚も執拗に鉄条網に近づき、かつての居場所に戻ろうとしたカン上等兵。彼にとつての「境界線」であった鉄条網は、今もそこにあるのだろうか。

（やすい あけみ）

人間の心、神秘が宿るところ

吉見かおる

私にとって世界一の映画は『少女の髪どめ』（Maïd Maïd: 監督・イラン・二〇〇一年）である。舞台は厳しい冬のテヘラン。建設現場でお茶くみの仕事をする十七歳のイラン少年ラティフが主人公である。そこではイラン人の他にアフガン難民も働き、移民調査官が常に入出入りしている。口が悪くて喧嘩っ早いラティフは、なけなしのお金を密かに貯えることが唯一の慰めであった。

ある日、工事現場にアフガン難民の少年ラーマトがやって来る。ひ弱でろくに口もきけないラーマトに過酷な砂運びの力仕事ができるわけがなく、ラティフに代わりお茶くみの役目が与えられた。仕事を奪われたラティフは怒りを爆発させ、壮絶な復讐をくり返す。そんなある時、静かな風に乗って炊事場から少女のような歌声が聞こえてきた。のれんをかきわけてそっと覗いてみると、そこには隠していた長い髪をおろした少女の姿があった。あのラーマトはバランという名の女の子だったのである。

その時から、ラティフの心に自分でも説明のできない何かが湧いてくる。痛みか、苦しみか、慈しみか。一体何を感じたのだろう。一方、バランは違法労働を摘発され、国境近くのアフガン難民集落に帰ってしまった。彼女に会いたい一心のラティフは親方に許可をもらい、バランを探す旅に出る。途中、自分の心境を察したような人生訓をつぶやく靴直しの老人に出会う。「孤独な男の隣には神様がいる」。しんみり聞き入るラティフにもうあの荒々しい少年の面影はない。その後、バランを助けようとラティフは自分のIDカードを闇市で売るのが、皮肉にもそのお金は別の人に渡ってしまうのである。

映画の終盤、バランが家族とアフガンに帰国すると知り、ラティフはショックのあまり絶望に陥る。しかし翌日、その悲しみを心にそっとしまし、バランの出発を静かに見届ける。最後まで二人の間に一言も交わされない。雨の降るなか、一人残されてしまうラティフだが、その顔には優しさに溢れる笑みがあった。それは、人生には美しいものがあり、そして何よりも、人を愛すことのできる心が自分のなかに存在するということを、ラティフは初めて知ったからだと思う。

（よしみ かおる）

Relevant Now More Than Ever

Étienne Marceau

The Man Who Planted Trees (Original French *L'homme qui plantait des arbres*) is one of those movies that are worth watching every few years. Adapted from the short story of the same name by Jean Giono, famous for his stories usually set in Provence, the South of France, its environmentalist message is relevant now more than ever. The animated short film was made by Frédéric Back, a German-born artist who emigrated to Canada and became a beloved figure of the national public broadcaster Radio-Canada (CBC in English). It won the Academy Award for Best Animated Short Film in 1987. It is one of those masterpieces that people of all ages find something meaningful within. The story, narrated by the deep and soothing voice of Philippe Noiret (Christopher Plummer for the English version) makes us feel concerned, involved. Imagine being captivated by your grand-father telling a story, where reality and fiction are indiscernible.

The Man Who Planted Trees does not have a complex plot: it's all in the title. But the slow pace of a shepherd who dedicates his life to planting trees, one by one, is captivating. The audience quickly understands that a single person, with a simple action, can create significant changes in the world around them. The first few trees to be planted require a lot of

care and grow in a deserted, arid ground. Ruins nearby reveal a village that existed years ago, but the well is dry now and the ground is no longer fertile. Only years later can we start to see the fruit of this hard labour gain momentum, and eventually some sense of autonomy; new trees appear naturally, the ground retains humidity, etc. Only a tiny percentage of the trees planted will reach maturity; but that is not a reason to lose hope. As you have already understood, this short film is a beautiful allegory that leaves us feeling hopeful and confident in our ability to create a better world. The shepherd, Elzéard, is generous and patient in his actions, devoid of selfishness and without any rewards in mind other than seeing a new forest flourish, not even for his own enjoyment, but for the generations to come.

(エティエン マルノ)

Growing Through Relationships

Eric Hirata

While teaching a film-studies course a few years ago, I needed to select four movies that my class would watch scenes from and discuss during the school year. I felt the selection of the first movie was crucial. Although the class coordinator recommended *Finding Nemo*, I wanted something with a little more substance. Don't get me wrong, I'm sure there are useful themes and lessons in *Finding Nemo*, but I wanted a movie that would have a bigger impact on my students. In the end, I chose my favorite movie, *Good Will Hunting*.

The movie explores the issue of trust in relationships through the character Will (Matt Damon). Will's relationships with his friends, therapist, and girlfriend help him grow as a person and teach him that it is ok to want more out of his life. Despite being a mathematical genius, Will begins the movie working as a janitor, spending his free time with his friends at batting cages and bars while getting into occasional fights. Will's best friend, Chuckie (Ben Affleck), in a heart-to-heart, tells Will that he is better than the life he's living and that Will owes it to himself to better his position in life even if that means leaving Chuckie and his friends behind.

Later, Will befriends Sean (Robin Williams), a psychologist responsible for helping Will, with whom he shares a

similar background of abuse and abandonment. Unlike the relationships with his friends, Will is initially skeptical of everyone and it is not until Sean breaks through all Will's defense mechanisms of mocking, belittling, and offending those who are trying to help him, that Will starts to grow as a person. It is only after this that Will decides he will try to reconnect with Skylar (Minnie Driver) whom he pushed away because he couldn't look past his own insecurities and background to trust her.

Because I could only show a limited number of scenes in class, many students had asked how they could watch the movie because they always wanted to see more. In the pre-streaming days, it wasn't easy finding older movies. When Robin Williams passed away in 2014 and the world remembered his comedic roles, I saw a post on *Facebook* from one of my former film-studies students who loved him in *Good Will Hunting*. She had bought the movie and it had become one of her favorites, too.

(エリック ヒラタ)



The freedom everyone needs

Jérôme Paccoud

Given my nationality, I did consider introducing a French movie, but I feel compelled to talk about an American movie that I saw recently, which left me with a very special feeling: a thirst for freedom. Without doubt, many of us are all too aware of the curtailment of our freedoms in this unusual time as we face the challenge of Covid-19. The movie relates the story of two women, one a shy and submissive housewife and the other an independent waitress with a strong personality. Despite the great differences in their lifestyles and personalities, they are best friends and decide to spend a few days together to break the monotony of their daily lives. Because of a violent encounter at the beginning of the trip, their planned short stay in the countryside turns into an epic road trip across the United States in flight from the pursuing police.

From this description, I expect many of you to guess the movie I am going to describe—*Thelma & Louise*, written by Callie Khouri and directed by Ridley Scott.

The story of this road movie, the seemingly simple script of which actually masks greater complexity, made me reflect on the precarious balance between empathy, freedom, and justice.

The plot and protagonists are thoroughly convincing, particularly the evolution of the characters of Thelma, played by

Geena Davis, and Louise, played by Suzanne Sarandon, which creates a powerful narrative. The emancipated woman character of Louise drives the friends' story in the first part of the movie. As the film continues, however, Thelma begins to discover her freedom, making her own decisions and questioning her husband, conventions, and social pressure. She thus comes to play an increasingly important role, and we see how Louise grows stronger, more determined, and more fulfilled through every encounter and adventure.

Furthermore, the choice of two actresses in place of two male actors as the main characters in a road movie is quite original. It was a courageous choice by the writer and director at the time the film was released. With beautiful cinematography, the movie deals with various themes such as friendship, sisterhood, perceptions of justice, and feminism. This movie ends in an unexpected way that left me with an unforgettable feeling. To me, by breaking all the usual patterns of American movie production and despite being released in 1991, *Thelma & Louise* still feels modern, perhaps more so than some recent movies. It undoubtedly stands out from other films that I have seen.

(パク ジェローム)

A Movie for Teaching Language and Cultural Understanding: “Fried Green Tomatoes”

Paul Allen Crane

Many years ago, I taught a required class for freshman students in the Department of British and American Studies that we dubbed, “The Movie Class”. Entire movies were not shown in class for various reasons, but we did show selected scenes from movies. Over the course of the semester, the students ended up watching scenes from about three to four different movies. In a typical class, a couple of scenes, broken down into three-minute segments would be watched, and then students would do a variety of task-based learning activities based on the language, culture, and other aspects that could be derived from each scene. It was up to each teacher to choose their own movies, and both the teachers who taught the classes, and the students who took them really enjoyed and benefitted from them. If students were interested in watching any of the movies in their entirety, they could view the DVDs in the now defunct “Media Learning Center”.

One movie that I used as teaching material was “Fried Green Tomatoes” released in 1991 and based on the 1987 best-selling Fannie Flagg novel “Fried Green Tomatoes at the Whistle Stop Cafe”. The reason for choosing this particular movie was simply based on my memory of the various emotions I felt when I had first watched it, which shifted between shock at the scenes of racial discrimination and prejudice, to

sadness when the characters experienced illness, injury, and death, and to happiness in the joy and the humor that was sprinkled throughout the story. When I watched it from the perspective of language teaching, I realized that not only is it a great story with interesting dialogs, but it is also brimming with cultural and sociological themes that make it interesting for teaching about American culture.

The setting of the movie alternates between present-day Alabama and 1920's rural Alabama as two stories. The first story, set in the present, is about Evelyn, a middle-aged housewife in the midst of menopause and an unsatisfying marriage who visits a nursing home and meets one of the residents, Ninny Threadgoode. Ninny tells Evelyn stories about the Whistle Stop Cafe run by the two main characters, Idgie Threadgoode and Ruth Jamison, who are close friends, and the townsfolk who live in Whistle Stop back in the old days.

It might be hard to find one movie that covers so many sociological themes, such as racial discrimination, domestic violence, bullying, poverty, justice and gender roles through a story centered on relationships with such appealing characters.

(ポール アレン クレイン)

Stagecoach

Tom Kenny

1939 has been called one of the greatest years in American film, with *Gone with the Wind* sweeping the Oscars, and *The Wizard of Oz*'s amazing Technicolor show. However, one black & white film from that year stands apart for its revitalization of the American Western genre: the movie *Stagecoach*, which catapulted 32-year old John Wayne to stardom, and made director John Ford an important influence over both his contemporaries and the generations of filmmakers who followed.

Ford had directed dozens of shorts and features beginning in 1917, during the heyday of the silent era, and had gained notoriety especially for his Western/Action movies. When sound came to the movie theaters in 1927, Ford took a break from creating Westerns, and shifted to light comedies and dramas. Ford earned an Oscar for Best Director in 1935 with his drama *The Informer*. By 1938, Ford had earned the respect of Hollywood's top actors, directors and producers, and was poised to reinvent the Western.

Audiences had had enough with low-budget cowboy movies shot on Hollywood backlots and sound stages, so Ford brought his vision to life by choosing Monument Valley, Utah for his on-location shooting. Ford played no small part in popularizing its towering, vivid-red buttes, a site now familiar to audiences from movies such as *Forrest Gump*, *Easy Rider*, and *Back to the Future Part III*, to mention a few. Ford seamlessly intertwines wide panoramas of vast landscape with close shots of the 9 travelers aboard the stagecoach, reminding us

of how their individual problems and interrelationships seem insignificant by comparison.

Ford had an easier time casting Monument Valley for his picture than he did John Wayne in the heroic role of The Ringo Kid. The big studios told Ford only a star like Gary Cooper in the lead would make it a box-office smash, but Ford was adamant that Wayne was perfect for the part. And he was. Wayne's performance is an effortless balance of revengeful, naive youth and restrained manliness. "Well, there are some things a man just can't run away from," Ringo intones. Ford deliberately gave him less dialogue than other characters, and it's what Ringo communicates in his protracted silences that adds gravitas to his character, from the moment the camera zooms in on the Kid, Winchester rifle in hand, until he throws himself into the dirt in the film's final shoot-out.

Wayne and Ford would collaborate 13 more times over the next 24 years. Together, they sculpted an image of rugged individualism that would come to define American masculinity. *Stagecoach* might not have been a major award-winner in 1939, but it has more to say about what America is today than its contemporary rivals.

(トーマス ケニー)



Hunger où l'art de déranger

Laurent Annequin

Lorsque l'on me demande quel est mon film préféré, je me sens un peu embarrassé et penaud de ne pouvoir répondre facilement à cette question qui semble pourtant si anodine, mais qui m'est insurmontable. En effet, ce n'est pas un, mais une dizaine de films qui me viennent à l'esprit, et encore plus si je prends le temps de réfléchir. Par conséquent, je ne parlerai pas de mon film préféré, mais plutôt d'un film qui m'a profondément marqué, *Hunger*. C'est un film qui a été réalisé en 2008 par Steve McQueen, non pas l'acteur de *La grande évasion* ou de *L'affaire Thomas Crown*, mais l'artiste et réalisateur britannique à qui l'on doit *Shame* ou encore *Twelve years a slave*. Ce film retrace la grève de l'hygiène, puis de la faim entreprise par Bobby Sands et d'autres détenus de la prison de Maze en 1981. Membres de l'IRA, l'armée républicaine irlandaise provisoire, ils militaient pour l'indépendance complète de l'Irlande du Nord et la reconnaissance d'un statut de prisonnier politique que le gouvernement de Margaret Thatcher leur refusait, préférant les considérer comme des détenus de droit commun. Ce film m'a donc profondément marqué, voire bouleversé et cela a plus d'un titre. Premièrement le thème. Quand j'ai vu ce film, je venais de lire deux romans de Sorj Chalandon, *Mon traître* et *Retour à Killybegs* qui traitent également de la cause irlandaise et qui

m'avaient déjà profondément ému. Deuxièmement, Michael Fassbender. Cet acteur germano-irlandais a dû perdre plus de 14 kg pour le rôle et sa prestation lui valut de remporter le British Independent Award du meilleur acteur. Son charisme et sa transformation physique au cours du film sont vraiment impressionnants. Enfin, la mise en scène remarquable de Steve McQueen. Les différentes techniques qu'il utilise le long du film pour montrer et faire ressentir aux spectateurs le calvaire enduré par les prisonniers atteignent parfaitement leur objectif. Je me souviens plus particulièrement d'un fabuleux plan en caméra fixe de plus de 15 minutes pendant lequel un prêtre, joué par Liam Cunningham, tente de dissuader Bobby Sands d'entreprendre une grève de la faim dont les conséquences tragiques sont prévisibles. Ce dialogue, mais aussi la violence carcérale et le filmage de la lente agonie de Sands, qui au bout de 66 jours de privation va finir par mourir, nous prend littéralement aux tripes. Cela fait déjà 10 ans que j'ai vu ce film, mais je n'ai toujours pas oublié le malaise que j'ai ressenti à la projection de ce long métrage. C'est un film coup de poing, dérangeant, parcouru de multiples métaphores visuelles qui ne peut laisser indifférent le spectateur et qui fait toute la force du cinéma.

(ローラン アヌカン)



私の「世界一」の映画

執筆者一覧

言語教育開発センター

世界教養学科

グローバルビジネス学科

フランス語学科

国際教養学科

フランス語学科

世界共生学科

学長

国際教養学科

現代英語学科

世界教養学科

英米語学科

英米語学科

世界教養学科

国際教養学科

世界共生学科

フランス語学科

世界教養学科

世界共生学科

英米語学科

現代英語学科

現代英語学科

国際日本語教育インスティテュート

現代英語学科

世界共生学科

世界共生学科

フランス語学科

世界共生学科

英米語学科

フランス語学科

浅井 寿生

石田 聖子

磯村 昌彦

伊藤 達也

今泉 景子

大岩 昌子

小野 展克

亀山 郁夫

後藤 希望

佐藤 雄大

白井 史人

高橋 直子

新居 明子

沼野 充義

根無 一信

濱嶋 聡

林 良児

福田 真人

堀部 純子

真崎 翔

ムーディ 美穂

室 淳子

安井 朱美

吉見 かおる

エティエン・マルソ

エリック・ヒラタ

ジェローム・パク

ポール・クレイン

トーマス・ケニー

アスカン・ローラン